旭川医科大学研究フォーラム 11　：130 ～ 132，2010

学生のページ

旭川エリア合同学生自主組織「はしっくす」に関して

佐　藤　裕　基*　土　岐　圭　佑**　鈴　木　美　紗*

1．はじめに

旭川ウェルビーイング･コンソーシアム学生会議「はしっくす」は、母体となる旭川ウェルビーイング・コンソーシアムの設立から約半年後の平成 21 年 4 月より活動を開始している。旭川ウェルビーイング・コンソーシアムの構成校である、旭川医科大学、旭川大学･同女子短期大学部、北海道教育大学旭川校、東海大学旭川キャンパス､旭川工業高等専門学校の 6 校（以下、連携校とする）の学生が連携し、プロジェクトを推進することが大きな特徴の一つである。

本稿では、この「はしっくす」の約 1 年半の取り組みを振り返ると共に、学生や若者がどのように旭川という「地域」に対して貢献できるかを考えたい。

2．各プロジェクトの状況について

これまで「はしっくす」では、いくつかのプロジェクトを企画・遂行してきた。ここでは、代表的なプロジェクトをまとめながら、「はしっくす」の活動に対するレビューとしたい。

2-1.「学生による学生のためのキャンパスフェスタ」の開催

このプロジェクトは、中高生にとって、大学生や短大生、高専生の実際の生活は、みえづらい場面があるというニーズからスタートした。中高生にとって高等教育機関への入学は一つの「受験」としての意義があると同時に、新しい「生活」のスタートでもある。これまでは､どちらかといえば｢受験｣に比重をおいた｢学校紹介」が行われる場面が多かったが、このプロジェクトでは、逆に「学校生活」の方を中心とした形式で企画した。高等教育機関の実際の学生が企画を主催することにより、学生の「生の声」を伝えようという考えた。

実際の学生生活がイメージできれば、自ずと受験に対するモチベーションの向上につながると同時に、最近話題となっている高校－大学・短大・高専への橋渡しとしての役割を一部担うことも可能になると考えた。

実施においては、各連携校の学生が、学生生活や教育機関での勉強・実習の様子を伝える展示や企画を行うと同時に、その一部を実際に体験する「アクテビティ」、さらに各連携校の教員による模擬講義を行った。

各連携校とも、学校行事などの時期が必ずしも一致しておらず、かつ中学･高校の行事なども加味すると、実際の開催日程が定まりづらかったものの、各校の学生と教職員の協力により､｢具体的な学生生活をイメー

図 1　平成 21 年度の『学生による学生のためのキャンパスフェスタ』の様子

*旭川医科大学　医学部医学科　**北海道教育大学大学院　教育学研究科

ジできた」と回答する参加者、そして「次回も参加したい」と回答する参加者が 9 割を超えるなど、中高生が、地域の高等教育機関に興味をもち、進学の選択肢として大きく浮上したことが明らかとなった。

2-2. 「全道連携ゴミ拾い」への参画および主催

「全道連携ゴミ拾い」は、札幌、江別の 2 地域と「はしっくす」が合同となって企画した取り組みである。「ゴミ拾い」自体、現在道内でも様々な地域で行われているが、実際に「ゴミ拾い」が環境向上に役立つ、あるいは環境問題を解決する糸口になっていると感じられる場面が少ない。それは、「ゴミ拾い」自体が地域（ローカル）を主体とする取り組みである一方で、環境問題はグローバルな問題であるからである。

この「ローカルな取り組み」と「グローバルな問題」を結びつけ、北海道全体としての環境問題の解決を図り、なおかつ、「ゴミ拾い」という実際の行動と「環境問題」という（地理的、分野的に）広い視野を身につけようと、「はしっくす」と上記 2 地域を加えて行った。

上記の目標を達するためには、「同じ時間を全道で共有する」ということが、（肉眼では見えない）各地域を結ぶために必要であると思われ、平成 22 年 5 月 8 日に道内 3 地域で一斉にゴミ拾いを行うこととした。また、各地域が持続的に環境を向上させる（あるいは維持する）ためのワークショップを行うこととした。これは「キレイな（町･地域名）を作るキャッチフレーズ」を作るワークショップとして、ゴミ拾いにひき続いて行った。

「はしっくす」では、これまでゴミ拾いに関し多くの実績を残している東神楽町の共催、協力を得て、当日も東神楽町民の皆様と河川敷の清掃活動を行った。また、ワークショップで決定したキャッチフレーズについては、東神楽町の町長である川野恵子氏に手渡され、町役場に掲示していただくこととなった。

これまでにも「学生主体のゴミ拾い」は全国各地で行われてきたが、「ゴミ拾い」という行動と、その背後に存在する環境問題や、個々人の意識に踏み込んだ企画は少なく、この点では本プロジェクトは評価できると考えている。しかし、実際には、このような環境活動は継続性を持つことが重要であり、今後の取り組みが実ってこそ、はじめて今回のプロジェクトが評価可能となるものと思われる。

図 2　平成 22 年度の『全道連携ゴミ拾い』の様子

2-3. 「あさひかわミュージックフェスタ」の開催

地域の人々にとって、高等教育機関の研究内容や学生の活動内容は不透明な部分も多いことが考えられ、今後、それらの面をさらに広く地域の人々に発信していく役割を「はしっくす」では、担うことが出来ると考えた。そこで「はしっくす」では、「音楽」を通した取り組みを通して、高等教育機関に通う学生の活動の特徴や成果を地域の人々に知っていただき、学生活動の内容を明らかにしたいと考えた。

このプロジェクトは平成 22 年 6 月 26 ～ 27 日に、旭川平和通買物公園 4 条通 8 丁目付近を会場とし行った。参加団体は、旭川市内の高等教育機関に所属している軽音楽部や吹奏楽団、各種アンサンブル団体、よさこいサークルなど 13 の音楽系団体等が日頃の練習成果を披露した。

この企画を実施し、最も評価すべき点としては、聴衆から、「良い演奏だったよ。」「大学生も頑張っているね。」などといった言葉を多く頂いたことであるが、今後に向けては、演奏環境の整備（特に音量について、周囲の店や聴衆、通行人への配慮の必要性）、宣伝方法の工夫などが挙げられる。

このプロジェクトでは、多くの地域の方と直に触れ合うことができ、学生活動の内容を一面的ではあるが、地域の方々に知っていただく絶好の機会であった。このプロジェクトにより、学生活動の内容に透明性が増し、地域の理解が得られ、地域と大学の繋がりが深まることはもちろんのこと、「音楽の街・旭川」の一端

図３　平成 22 年度の『あさひかわミュージックフェスタ』の様子＞

を担う行事への発展を期待したいところである。

2-4.　旭川市新駅舎の一次開業イベントへの参画

旭川市の駅舎は、平成 22 年 10 月 10 日に新駅舎へと移行するが､その際の地域の取り組みの一環として、「はしっくす」が市民 1000 人程度の写真を撮影し、旧駅舎、新駅舎、そして旭川の象徴である「あさひばし」の写真をモザイク画（数千タイルの写真を集合させた絵）として飾るという企画を､旭川市と共同で行った。

市民 1000 人の写真を収集するため、「はしっくす」では、各連携校、旭川市主催の行事などに参加し、市民の写真を撮影した。

新駅舎のオープン（平成 22 年 10 月 10 日）の際には、このモザイク画の除幕式を行い、縦 5m、横 15m の画として､新駅舎の仮壁に数カ月にわたって展示された。

2-5.　他のプロジェクト・ワークショップなど

各連携校の学生は、それぞれ特色あるカリキュラムの下に勉強を重ねているが、これらを融合・一体的に活動へ導くことにより、一つの大きなプロジェクトを遂行することが可能になると考えられる。そこで「はしっくす」では、連携校学生向けのワークショップやセミナーを行うことにより、連携各校の学生のスキルアップや他分野への幅広い興味を養うことを目指している。

これまで、「はしっくす」では、水問題、地球温暖化など環境問題に関するワークショップを開き、かつ実際に「打ち水」を行う企画を立案するなど、ワークショップで得た知識を、スキルや行動として表現できるような一連の取り組みを進めた。学際的な分野も広がりを見せつつある今、このようなワークショップで得る知識は、スキルとともに重要視されることが予想され、「はしっくす」がその一つの「場」として活用されうると考えている。

３．これからの展望と課題

これまで、「はしっくす」では、旭川市、東神楽町などと連携してプロジェクトを行ってきた。他にも地域の NPO 法人や、他大学の学生団体、他にも多くの団体と提携しながら取り組みを進めてきた。これまでは、地域との連携であっても、高等教育機関が複数存在する旭川市においては「どこへ声をかけていいかわからない。」などと言った声が聞かれていた。それらのニーズを｢はしっくす｣という一つのプラットフォームを通じてを汲み上げることにより、「地域に潜在的に存在するニーズ」と「地域で活躍したいと考えている学生｣とが出会うことが可能となったと考えられる。また学生の視点から見てみると、学生自身が取り組んでみたいと思っているプロジェクトに関し（逆にそれらを相談すべき場所がないこともあって）これまで、このような社会と学生との接点と、それによるプロジェクトの遂行と評価は、連続的な成果として捉えづらい側面があった。

今回、「はしっくす」により、社会と学生とが有機的につながり、さらに学生の力が一つの「資源」となりうるとすれば、社会側と学生側のニーズが上手にマッチすることが可能なはずである。そして、一見ばらばらで小規模に見える企画同士が連携しあって、一つの大きなプロジェクトを形成することもまた可能であろう。

この取り組みを維持･発展させるためには、「はしっくす」のような一つのプラットフォームが必要であると同時に、継続的・連続的な取り組みが必要とされている。「学生」は、数年の身分である場合が多く、多くの学生組織にとって、継続性は潜在的に大きな課題である。それは「はしっくす」も例外ではなく、各提携先と歩調を併せて、「はしっくす」も発展し続けられるようなシステムの構築が重要であると考えられる。